未来に向かって伸びる鶴嶺の子

鶴小だより 3月号

茅ヶ崎市立鶴嶺小学校
校長　日高　大司郎
令和５年２月２８日発行

育てにくさの正体

ご自分のお子さんが、育てにくいなあと感じたことはありませんか。「なんでうちの子は、こんなに泣くんだろう。」「なんでうちの子は、機嫌がすぐに変わるんだろう。」なんて、聞こえてきそうです。多くの保護者の方がこのような思いをもち、悩まれるケースを何度も目にしました。お子さんによっては、他者を巻き込んでしまうケースもあって、お友だちや近所のお家からの苦情を受けて、それに対応されることが頻繁にあったケースもありました。

そういった親御さんに共通していたのは、「自分の育て方が悪かったから、こうなっている。」という思いです。

しかし、それは違うのです。育てにくさを感じていらっしゃる保護者の皆さんは、総じて「よくやっていらっしゃる方々です。」それはそうです。様々なことを考えられてお子さんに向き合っているからこそ、「困り感」が生まれるのです。そうしているのにもかかわらず、それでもうまくいかないから、苦しくなるのです。お子さんを見ていない訳でも、きちんと育てていないわけでもありません。まずは、そのことに胸を張りましょう。

少し前に聴いた横浜国大の岡田菜摘先生のご講演から、いくつか子育てのヒントをお伝えしたいと思います。演題は、「ほどほどの子育て」でした。

1．子育てに高いハードルを設定しない

１つ目にお話しされたのは、まず目標をはっきりさせようということです。それは、子どもの「自立」です。言い換えると、社会に適応して自ら生きていく力の獲得です。そのためには、「子どもが自ら、もともともっている力」を伸ばすというスタンスをとることです。何から何まで関わって、こうして、こうしてではなく、親が「子どもにとっての安全基地（アタッチメント対象）」となって見守れればよいのです。

未熟な赤ちゃんは、世話をしてもらったり保護してもらったりすることで、「危機的な状況でも、この人のそばにいれば守ってくれる、保護してもらえる」ことを分かっていきます。だから、この人にくっついていたい、安心なんだとなるのです。これが子どもにとっての「安全基地」です。守ってもらえる確信があるから、自発的に知的好奇心で調べに行きたい！となるわけです。

ここで、このアタッチメントを基盤にした子どもへの関わりのポイントを紹介しましょう。

① 敏感であること

どうしてほしいのかに気がついて応えることで、子どもは、シグナルを出せば守ってもらえるんだと信頼感をもつ。シグナルに気がつくことがとても大切。

② 侵害的でないこと

手を出しすぎない。必要な時だけ応えるようにする。子どもが自由に周りの世界に働きかけられるように、信頼して任せる。失敗しても学びのチャンス。

③ 環境を構造化すること

子どもが、様々なことにチャレンジしたくなる環境を整える。ｅｘ．本を読め！でなくて、たくさんの本がある環境づくりをするなど。

④ 情緒的に温かいこと

言葉掛けや行動にやさしさをもつ。しかる場面で、間違ったことを言っていないとしても、そこに温かさがあるかどうか。子どもの安心感につながる。

2．１人で頑張らなくてはと思う必要はない

ぼくたちは、子どもと関わりながら「親」になっていくものであり、子どもと共に成長していけばよいとのお話しでした。失敗しても当たり前、周りからサポートを受けることを堂々としましょう。

そして、子どもを通じて関わり方を学ぼうくらいの気持ちでやっていきましょう。この時のヒントもお話してくださっていました。

① 子どもには生まれつきの個性（気質）がある

しつけが悪いから、育て方が悪いからと思っていたことの多くは、その子の生まれつきの気質のせい。他の子と違って当たり前。例えば、人見知り、よく泣く、反応が激しい、環境への慣れやすさ、積極性、集中力、機嫌のよさや悪さ、活発性、規則正しさ等すべて個性（気質）とのこと。

② 子どもの発達は、柔軟性が高い

今のかかわり方は、失敗したかもしれない、マイナスなかかわりをしてしまったと思っても大丈夫。ちょっと関わりを変えれば、子どもはぐっと変わる。いつでもやり直しが可能。

③ プラスの多さはマイナスをカバー

分かっているのに、感情的になってマイナスの関わりをしたとしても、よりプラスの関わりを多くすれば心配ない。一つの失敗を気にしすぎる必要はない。

少しは、子育てについて肩から力が抜けませんか。どうぞ「ほどほどの子育て」を実践してください。家庭、学校、地域で協力し合って、子どもを育てていきましょう。

大丈夫・・・、できます！！